

## 研究ノート

### 馮至の「北遊」未収の第一章「雨」と 筆名「鳥影」について

佐藤 普美子

して「鳥影」という筆名を用いたことは、すっかり忘れていたらしい。後、「北遊及其他」に「北遊」を収める時、なぜ「雨」一章を採らなかつたのかということ、また、「鳥影」という筆名はどのようにして思いついたものか、現在となつては、はつきりしないということである。

詩人馮至氏の一〇年代の作品に、「北遊」（四百五十七行・全十二章）という長篇抒情詩がある。この詩がかれたのは、一九二八年一月一日から三日にかけてであり、翌二九年八月、詩集『北遊及其他』（沈鐘社）に収められて出版された。

ところが、最近、馮至氏からいたただいた手紙（一九八四年十月二十日付）によつて、「北遊」は最初、『華北日報』副刊に発表されていたことがわかつた。しかも、一九二九年一月十日付の同刊第六号に掲載された「雨」と題する一章は、現在見られる「北遊」には収められていないものであること、さらに、発表時の署名は「鳥影」となつていて、この筆名は、この時しか用いられなかつたといふことも明らかになつた。

『華北日報』副刊に掲載された「北遊」が確認されたのは、一九八四年春のことと、中国社会科学院文学研究所の研究員によつてあるといふ。馮至氏自身は、この「北遊」の中に「雨」という一章が含まれていたこと、そして、同刊に発表するに際

### 一 「はじめに

詩人馮至氏の二〇年代の作品に、「北遊」（四百五十七行・全十二章）といふ長篇抒情詩がある。この詩がかれたのは、一九二八年一月一日から三日にかけてであり、翌二九年八月、詩集『北遊及其他』（沈鐘社）に収められて出版された。

ところが、最近、馮至氏からいたただいた手紙（一九八四年十月二十日付）によつて、「北遊」は最初、『華北日報』副刊に発表されていたことがわかつた。しかも、一九二九年一月十日付の同刊第六号に掲載された「雨」と題する一章は、現在見られる「北遊」には収められていないものであること、さらに、発表時の署名は「鳥影」となつていて、この時しか用いられなかつたといふことも明らかになつた。

『華北日報』副刊に掲載された「北遊」が確認されたのは、一九八四年春のことと、中国社会科学院文学研究所の研究員によつてあるといふ。馮至氏自身は、この「北遊」の中に「雨」という一章が含まれていたこと、そして、同刊に発表するに際

### 二 「北遊」未収の第一章「雨」

「雨」はもともと、現在見られる「北遊」の中の第四章「哈爾濱」と第五章「在公園」の間に置かれていたといふ。

氏から送つていただいた複写によつて、ここに「雨」を紹介したい。

北遊

鳥影

馮至の「北遊」未収の一章「雨」と筆名「鳥影」について

(五) 雨

接連落了三宵的寒雨、

頓覺得像是深秋天氣。

我寢寢地打開我的行篋、

我寢寢地把一件夾衣撿起——

啊、真是隔世一般、像是從古墓中

挖出來殘骸餘體：

這是我過去的青春嗎、

這上可有我一點繁榮的痕跡？

神呀、請你多給我些雨一般的淚珠、

我願把這些痕跡通通地洗去！

○ ○ ○ ○ ○

『昨日的春天已經到了芳芬的時節

滿園的梨花都要開了、

今朝因為要換夾衣、

所以分外起得早！』

心中充滿了洋洋的情緒、

『夾衣乍着心情好！』

在清涼裏我穿着這件夾衣、

不住地向着朝霞走去、

直到那血紅的太陽湧出來、

我向着牠深深地呼喚：

那時我體驗了愛情、青春的愛情、

那時我體驗了生命、青春的生命！

在清涼裏我穿着這件夾衣、

傍着黃昏的池塘繞來繞去、

水裏照映出新月一彎、

我向着牠輕輕地嘆息：

那時我體驗了愛情、青春的愛情、

那時我體驗了生命、青春的生命！

我嘗穿着牠拜訪過初相識的友人、

緊握着一本寫遍了命運的詩集、

凝望着那朵朵的白雲、

要把牠朵朵地放在衣袋裏——

如今哪、衣袋裡的白雲都已無形飛散、

幻想在我的面前重重閃去……

空望着雨中的異地風光、

心中充滿了淒涼的情緒、

『情懷呀、已經不似舊時、

怎當得起這舊日的衣裳、異鄉的天氣！』

怎麼幾日的隔離、

心情竟會這般的差異！

彷彿是幾十年的隔離、

心情竟有這般的差異！

○ ○ ○ ○ ○

走進來一位老實的客人——

『朋友呀、這件夾衣又瘦又小、  
不妨重做一身——』

『我感謝你、感謝你的忠告！』

我含着淚像是荒林中的野獸、

沒有言語地死守荒林；

這件夾衣像是天空的雲彩、

我要披着牠把舊夢追尋——

往日的遺痕、

往日的芳芬、

淚珠兒究竟不能雨一樣地洗、

淚眼却是雲一樣地陰沈、陰沈……

### 三 「雨」を採らなかつた理由

「北遊」が新聞掲載されてから、半年余り後に、詩集『北遊及  
其他』に収められる際、「雨」一章はなぜ採られなかつたのか。  
先にも述べた通り、馮至氏自身はその経緯について、もはや記  
憶していらないといわれる。

ただ、おおよそ次のように考へることはできると思う。

現在見られる「北遊」の、七章までの前半部分は、詩人が住  
み慣れた北京を離れ、行きたいた北方の都会ハルピンで、まの  
あたりにした様々の景物を通して、現実に対する嫌惡としだい  
に深まる孤独感を描くことに重点がある。

「雨」は、古い夾衣<sup>あわせ</sup>という形象に托して、過去の時間を追慕する心理が描かれている。もちろん、それは、現実に対する違和感から生じるものである点で、第四章「哈爾濱」、第五章「在公園」、第六章「Café」と共通したものをおもひてよい。しかし、

この三章が、方法的には、どちらかといえば、ハルピンの具体的景物との接觸を通して、よりどころのない自分自身の存在を浮きぼりにしていくのに對し、「雨」は、そうした具体的現実描写には乏しく、觀念的・象徴的色彩の濃い、他とはやや異質な一章となつてゐる。

また、第五章「在公園」には、「雨」と同様のテーマである、全てが自分と親密であった過去への思いを描く部分が含まれており、その意味で、「雨」をも包含する章とすることができる。

こうした点からみると、「哈爾濱」と「在公園」の間から、「雨」一章を取り去つても、欠落の感はないばかりか、むしろ、その方が、前半部の展開の上では、すゝきりしているといえるのではないか。

「北遊」に、「雨」を採らなかつたのが、他人の手になる削除や単なる脱漏ではなく、また、そこに何か政治的に不都合な文字が見えるというのでもない以上、やはり、「雨」一章がもう独特的の性格に、その理由が求められるだらうと思う。

### 四 筆名『鳥影』について

馮至氏の本名は馮承植、字は君培である。著作の署名はほとんどが「馮至」である。例外的に、『淺草』季刊第一卷第三期（一九二三・十一）所載の小説「猟寧」で「君培」を、また、『駱駝草』周刊（一九三〇）所載の詩「一、送一、髮」（第一期）「晚餐」（第二期）「一、星期五的夜晚 一、等待」（第九期）や散文「老屋」（第三期）では「至」一文字を用いている。

。

「鳥影」という筆名がどういう由来を持っているのか、馮至氏自身の記憶の中に残っていない以上、どんな推測も、推測の域を出るものではない。

ただ、「鳥影」ということばから、氏の歴史小説『伍子胥』の「後記」（一九四四年冬執筆）の冒頭部に出てくる「飛鳥之影」ということばが思い出された。

それは、おおよそ次ののような内容の文章の中で引かれている。

投げられた物体の描く美しい弧には無数の刹那があり、一瞬一瞬が「停留」であり「落下」である。昔の人は、すでにこのことを「鏃矢之疾」や「飛鳥之影」の上に見出していふと思われる。一人の人間のもつ一定の美しい時間も、こうした一つの放擲が描く美しい弧にたとえられる。すなわち、「停留」の中に「堅持」があり、「落下」の中に「克服」がある。（傍点は筆者による）

ここで引かれている「飛鳥之影」（『莊子』天下篇に見える語）が、これをかく十五・六年前の馮至氏の頭の中にもあつたといえるかどうかわからない。が、同時に、「鳥影」が、「飛鳥之影」のもつイメージを托していないともいいきれないでの、ここに参考として記しておくことにした。

いずれにせよ、「鳥影」が馮至氏の筆名であったことは、文學史に明記されてよい一つの事実である。

（一九八四年十一月十日）

〔付記〕

一九八四年十二月十四日付の氏の手紙によれば、筆名「鳥影」の由来については、筆者の推測通りのことであつた。青年期に『莊子』を読み、「天下篇」の一節「飛鳥之影、未嘗動也。鏃矢之疾、而有不行不止之時」に興味を抱いたことが、現在考えてみれば、この筆名を用いたきっかけであるということである。

また、同年十二月二十一日付の手紙から、「北遊」の新聞連載号数及び期間は、『華北日報』第三号（一九二九年一月六日）から第十二号（同年一月十七日）までであることが確認できた。さらに、この手紙の中で、氏自身から、「雨」一章の第十六行「夾衣乍着心情好！」は、宋代の女流詩人李清照の詞「菩薩蠻」の最初の句「風柔日薄春猶早、夾衫乍著心情好」にもとづくものであるという懇切丁寧な注釈をいただいたことも、併せてここに記しておきたい。

（一九八五年一月七日）